



看護師の「気付き」

「千葉県」稲村 歩美 いなむら あゆみ 20歳

「これからよろしくお願ひします」。慢性腎臓病を患った私は検査・治療のために入院をすることになりました。専門の小児科病棟であったため、似たような疾患を持つ小児が入院していました。約4カ月という、当時は途方にくれそうになった入院期間。緊張から挨拶も表情もかたくなってしまった私に、先に入院していた私たちは入院生活について教えてくれたり、遊びに誘ってくれたりして、私はすぐに溶け込むことができましたのです。

うになりました。多床室であり、気まずさから一日中カーテンを閉め切つて過ごしました。週末は家に外泊できたものの治療のためには入院を続けるしかないし、最初に陰口を叩き無視を始めた子は年下で、両親の面会が少ないことからストレスを感じているのかもしれない。そう思った私は仕方がないことなのだ、と両親や病院のスタッフに相談をすることはありませんでした。

いたら看護師さんはベッドの脇にしゃがんで目線を合わせて「大丈夫？ 辛いよね」と、私の手をそつと握つたのです。びっくりして、すぐに言葉を返すことができませんでした。それでも看護師さんは「私たちがいるよ。なんでも言つてね」とおっしゃいました。あれから10年。私は看護学生になり、国家試験を目前に控えています。看護師さんの手のあたたかさが、今でも忘れられません。あのときの私の辛い状況に気付いてくださった看護師さんのように、「気付き」を大切にし、心身ともに患者さんを支えられるような看護師を目指したいと思っています。

